

～なんだ

ひびを直そう

学校法人風間学園 ひかり幼稚園（宮城県白石市） [3～5歳]

<事前の様子>

泥んこ遊びをしながら、数日前に左官屋さんが修理していた壁を思い出し、「あそこの壁だよ」「あれは、ドロドロが固まるんだ!」「泥んこを固めるやり方知っているから教えてあげよう」とやりとりをする。泥団子を作っていると、そばのブロックの壁にひび割れがあるのを見付け、「ここも塗って直そう。やり方知ってるもん」と、ひびに泥を塗り始める。「この砂くっ付くかな」「こっちの泥んこ軟らかいよ」「あとは、乾かしてから、サラサラの砂をかけるといいよ。明日見てみよう」などと、砂の軟らかさ、場所によって砂のザラザラ感が違うことも話しながら塗っていく。



触らないように貼紙をして乾かしていたが、そのまま雨天の日が続き、泥が流れてしまった。

事例1 いろいろな所の土から、良さそうだと思う土を集めてひび割れを直す

場面① 黒っぽい土を探す

土の色の違いが見えてきて、「この辺の土、黒いよ」「こういうのいいんじゃない?」「掘ってみよう!」「固いね」と黒っぽい所を掘って集める。バケツの中で少しずつカップの水を足して混ぜる。できた泥を壁に塗る。この土はなかなか壁に付かない。「だめだねー」「少し固いかも…」「水が足りないんじゃない?」「もう1杯水を入れる?」「それじゃ、多いよ」などと言いながら試す。

場面② チョコレートの土を探す

「ベトリしたの見付けた」「ネバネバの土発見!!」と園庭のあちこちで集める。バケツの中で少しずつカップの水を足して混ぜる。「ちょうどいい固さだね」「トロトロしてる」壁に塗り「土はすぐに壁にくっ付いたよ」と言う。「隙間に流し込めばいい?」「すこし手で押さえながらやろう」などと話しながら塗る。



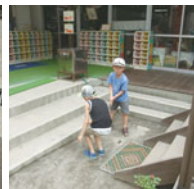
事例2 サラサラの砂を集めて固める

晴れた日、「この辺だったかなあ」「ここの砂もいいんじゃない」「あっ、こっちもあるよ」と言い、さっそく園庭のあちこちでサラサラの砂を集める。

サラサラの砂をかけてみたが、落ちてしまう。「砂、落ちちゃうね」「どうやってかける」「上からかけよう」などと話し合い、泥団子のように手で擦ってみる。

「ボロボロ取れる」「石が混ざるとくっ付かないなあ」「これじゃ、すぐに剥がれるね」「だめだね」「ベッタベタの土、ドロドロの土はないかなあ」などと、やりとりする。

保育者が「すごくベッタベタの?」と言うと、「うん、この前より水を入れて、混ぜたらいいんじゃない?」「ベッタベタになるようにしようよ」「うん、いいね」と言う。



事例3 (園庭補修用に運ばれた)山になっている土に気付き、ひびを直す土を作る

①大きなタライに土を集める。土をフルイにかけ「こうすると石が取れるからやった方がいいよね」「小さい石が取れた」と言う。「土をたくさん使おう」と言い、集める。

②水を混ぜる。「水はどれ位がいいかなあ」「いっぱい汲んできた方がいいよ」と言い、タライの土にバケツで汲んできた水を入れる。水が多かったと感じて、「少し、水を取ろうよ」「どうやって取る」「ちょっと斜めにするのと取れるよ」「じゃあ、そっちを持って」「もっと取った方がいいね」「この位?」と言い、水の量を考え合う。

③土の様子を確認する。「この位かなあ」「固まる?」「壁にくっ付くかなあ」「タライのここに付けてみよう」「そうだね」と言い、タライのふちで試す。



考察

土の感触を確かめながらの泥んこ遊びとなった子どもたちは、どうしたら「壁のヒビを直せるか」「どの土だと固まる?くっ付く?」をテーマに土やひびを見つめ、水・泥・砂・土・石に直接手で触れて遊ぶことで感じていくものは大きかった。泥んこ遊びは一年中見られる姿である。繰り返し繰り返し遊ぶことで、どの位の水の量で?どの、どんな土がいいか?固さは?などがわかっていくので、遊びにより出来上がりの形にも変化が見られる。泥んこ遊びの体験を通して得ていくことはずっと続き、繰り返されると思う。今後も、子どもたちの試行錯誤を見守っていきたい。

ポイント

「ひび割れを直す」という遊びの目的があるので、土や土が乾く様子をよく観察し、目的に向かう試行錯誤を重ねています。ひびを直していた大人の姿や使っていた物は、自然に子どもたちの興味の対象になり、記憶されていることがわかります。その様子を「知っている」「できると思うからやってみよう」と再現する遊びになるだけでなく、“ひびを直す土”によって乾いた様子が違うことを共有しています。考えを出し合って協同的に遊びを進める姿から、「科学する心」が育まれている体験が、遊びの面白さにつながっていることが見えてきます。

<科学する心が見える — 違いに気付く> 「～なんだ」

ここから見える

この事例の子どもたちは**土や水の量によって、乾いた様子が違うことに気付いています**。ひびを直すために経験を生かして、しかも、共通体験から考え合って試行錯誤を重ねています。その体験から、初めに「ドロドロ、ベツベツする固まりやすい土を集める」、次に「形を自由に変えられる程度に固まるように水を混ぜる」、思うようにできたら仕上げに「適度に水で湿らせたサラサラの砂で固める」という、変化の様子や順序性が共有されています。

- ① 大きなタライに土を集める。
- ② 土をフルイにかけ
「こうすると石が取れるからやった方がいいよね」
- ③ 「小さい石が取れた」
- ④ 「土をたくさん使おう」と、土を集める。
- ⑤ 水を混ぜる。「水はどれ位がいいかな」「いっぱい汲んできた方がいいよ」と言い、タライの土にバケツで汲んできた水を入れる。
- ⑥ 「少し、水を取ろうよ」「どうやって取る」
- ⑦ 「ちょっと斜めにすると取れるよ」「じゃあ、そっちを持って」
- ⑧ 「もっと取った方がいいね」「この位？」と、水の量を考え合う。
- ⑨ 土の様子を確かめる。「この位かな」「固まる？」
- ⑩ 「壁にくっつくかな」「タライのここにつけてみよう」「そうだね」と、タライのふちで試す。



- ・ ひび割れを直すのによい土を、みんなで使えるように、沢山集めて作れるタライがよいと考えた。①
- ・ 事例2で「石があるとくっ付かない」と気付いたので、フルイで石を取り除く考えを友達に伝えている。また、実際に小さな石が取れたことがわかり、思った通りになったことを共有している。②③
- ・ いい土ができてきたので、その土をたくさん集めることを伝え、同じ思いで一緒に遊ぶ“みんな（仲間）”で作る気持ちを表している。④
- ・ 集めた土に水を混ぜるという手順や、土の量に対して適した水の量があるということが共通になっている。⑤
- ・ 「土に混ざった水加減が多かったんだ」と気づき、共感する。混ぜてしまった水を取る方法や量・加減を話し合い、協力して進める。協同で取り組んでいることや協力する必要があるという意識がある。⑥⑦⑧
- ・ ひび割れを直すための土として、程よい水分・軟らかさを確認し合っている。⑨
- ・ タライの側面に土を塗って、目的の土ができたか確かめる。⑩

今までの泥遊びや泥団子作りの経験やこのひび割れを直そうという目的で遊びを重ねてきた経験から、「土に水を混ぜると固まる土ができ、それを乾かして、さらに水とサラサラの砂を使って表面を固める」という手順や土の変化が共通の知識となっています。その上で、土の性質や水分量など細かな観察や加減を考え合うことで、体験している内容の質が高くなり、「科学する心」が育まれています。

子どもたちが目的を達成することで遊びの内容や保育を評価するのではなく、その過程で体験していることを把握して認め、今後の保育の方向を考えることが重要です。

この事例の保育者は、子どもたちが夢中になって遊ぶ中でひび割れを直す方法を考え、「科学する心」が躍動して育まれている様々な体験を捉えています。保育者は、目的が達成できるように教えたり環境を整えたりするだけでなく、遊びの過程で子どもの体験が深まるように寄り添って時間や場を保障したり、子どもたちの遊びの行方を見守って援助したりすることが大切です。

視点を
変えて